

世紀の発見、殿塚・姫塚発掘調査 まさに地域が一丸となった取り組み―

殿塚・姫塚発掘調査は観音教寺の濱名徳永住職が発案し、早稲田大学滝口宏教授の指導のもと昭和31年に実施されました。

昭和31年3月27日～4月6日の第1次調査では、姫塚の墳頂部で円筒埴輪列、前方部北側で人物や馬形の形象埴輪が原位置のまま横倒しになっていることが判明し「戦後最高のもの」と言わしめる、大型で表情豊かな人物埴輪が出土しました。

同年4月28日～5月6日の第2次調査では、殿塚で副葬品がまとまって置かれた石室や、姫

塚と同様北側中段にあったとされる人物埴輪などが周溝の中に転がった状態で出土しました。

発掘作業の中心となったのは早稲田大学の学生でしたが、地元の青年団、消防団、婦人会、高校生や中学生も調査を手伝いました。さらに、京成電鉄と成田バスの協力により都内200校の社会科教員を無料招待するなど、調査の公開もなされたことから、殿塚・姫塚の発掘調査はまさに地域一体で実施され、それ以降地域の文化遺産として活かされることとなりました。



①



③



②

●「埴輪」とは…

粘土で作られた焼き物で、飾りとして古墳の上や周りに並べ立てられているものです。古墳造りが始まった頃の埴輪は、そこに葬られた支配者の霊を守るために立てられました。やがて人物埴輪などを交えてさまざまな儀式のように表現するようになりました。

埴輪の存在は、文字のほとんど使われていなかった古墳時代の風俗や習慣などを知る大きな手掛かりとなります。また、埴輪は地域によって顔や模様の特徴が異なり、人物だけでなく動物や家などさまざまな種類のものが存在します。

山田・宝馬164号墳（通称…にわとり塚）で出土した鶏型の埴輪（左写真）は、時を告げ、暗闇の世界から太陽を呼ぶものとして、死者の再生・復活を願って立てられたとされています。





国指定史跡・芝山古墳群

殿塚・姫塚とはー

千葉県北東部の下総台地分水界を水源として、太平洋に注ぐ木戸川流域の標高40メートルの台地上に位置し、17基の古墳で構成される「国指定史跡・芝山古墳群の中心的な古墳」です。横芝光町中台に所在し、殿塚は芝山町、姫塚は観音教寺が地権者として管理しています。

殿塚は全長88メートル、高さ7.8メートル(6世紀中頃)、姫塚は全長58.5メートル、高さ4.8メートル(6世紀後半)、ともに前方後円墳で二重の周溝がめぐり、被葬者は武射(武社)のクニ(古墳時代の芝山町・横芝光町・山武市あたりの呼び名)の支配者に連なる豪族と推測されています。

昭和31年の発掘調査で出土した埴輪群が「葬列の様子」を再現したものであることが判明するとともに、埴輪が外を向いて立てられていることから埋葬者よりも古墳を見る人を意識して並べられたと考えられ、殿塚・姫塚のような首長クラスの古墳は、見晴らしのよい立地と埴輪列によって支配者の威厳を示す政治的役割を果たしていたとされています。



- ① 殿塚の発掘風景(昭和31年)
- ② 出土した武人埴輪の様子
- ③ 出土した馬子埴輪の様子
- ④ 春にはきれいな桜が咲きます
- ⑤ 「芝山はにわ祭」で古代人の一族が現代に降臨する様子

●「古墳」とは…
古代では人が死ぬと、残された者が靈魂を肉体に再び戻し同化させようと祈りや儀式を行いました。特に、首長やリーダーの霊は受け継がれるべき特別な霊とされ、悲しみと追慕の念の中でさまざまな行事が催されました。

そうした死者を手厚く葬るために、死者がかつて支配していた地域を見晴らす最もよい場所に象徴となるような特別な形の土を盛り、その中に数々の捧げものや飾り物、死者が生前使用していたとされる品物などを副葬し、それら一体をお墓としました。

古墳は3世紀中頃から7世紀までの古墳時代の支配者や、有力家族のお墓に限られるため、古墳自体がその時代を象徴する政治的・社会的記念物とされ、古代の人が死をどのように考え、どのように生きてきたかを形として残したものと推測されています。

※古墳は日本全国で15万基以上存在し、その形の多くが円墳となります。そのほかにも殿塚・姫塚のような「前方後円墳」や「前方後方墳」「双円墳」などさまざまな形が存在しています。